この業に執念深く取組んでこそ、私の分野の研究に、いささかなりとも貢献し得る仕事が出来そうな気がする。

卒論雑感——近世

谷脇　理史

これまで私に提出された卒業論文は、江戸時代の小説（特に西鶴の小説）をあつかったものがほとんどであるが、他にも近松の世話浄瑠璃をとりあげたものが数篇、中には、長唄の詞章や江戸の庶民気質を論ずるといった変り種もあった。卒業論文には、自分の最も興味を持てる問題をとり上げるのが最善と考える私には、もっと変り種があってもよいような感じがするが、これまで卒論を書いた諸君は、意外に正統派であったようだ。

ところで、近世の小説を卒業論文にとりあげた諸君が最も困るのは、研究文献が非常に少い、ということであるらしい。もちろん、西鶴などの場合、文献目録を見れば明らかなように、万葉・源氏などにはとても及ばないとしても、それ相応に研究文献があるとは云えるであろう。しかし、ある程度テーマをしぼって研究文献を集めようとすると、自らの考えようとする問題をとり上げ、立論する上で何らかの手がかりを与えてくれる参考文献が非常に少なく、作品を読めば解るようなことをきり書いてなくて、ガックリくる訳である。

例えば、一つの作品をとり上げて論じようとする場合、その作品についての様々の見方を提出した多数の文献があれば、それらを比較検討しながら自分なりの問題を設定し、立論して行きやすい訳だが、研究の歴史が浅くこれまで十分な作品論が多く書かれているとはいえない場合の多い近世小説をとりあげようとすると、他人（これまでの研究家）にたよって一応の形をつけるということが、非常にむずかしいことになる。それ故、幼いなりにも自分の立場から綿密に作品を読みこむことによって、ともかく自分の頭で対象とする作品を自分なりに把握して行かざるをえない訳である。

が、考えてみれば、参考文献が少いということは、人のフンドシで相撲をとるのと異なり、ともかくも自分なりの新見を出しやすい訳だから、思い切ってぶちあたれば、時に面白い卒論が書ける、ということにもなる。そのせいか、現在まで私の見た卒論ですぐれていたものの多くは、自分なりに作品を読み込み、何とか自らの立場と論理によって作品を解明しようとしたものに多いようだ。と同時に、研究文献が少ないのに安心し、作品を読み込むことを怠って書かれたものは、作品の紹介と感想の羅列の域を出ず、何ともサマにならない状態にもなっているようである。

作品を綿密に読み込まずに作品を論じて行くことが基本的に誤りであることは、どの分野にも通ずるすこぶる当り前のことであるが、これまでの研究が十分でない近世小説の分野では、作品を読み込み自分なりに対象を把握出来ているか否かが、そのままよい卒論と悪い卒論の分れ道になっているようである。

卒論雑感——近代

鈴木　亨

学問のさびしさに堪へ炭をつぐ——山口誓子のごく初期の句。大